

『おれのためのノート』

登場人物

岸上大作

高瀬

角田ミドリ

無断複製・無断転載を禁止します。

公益財団法人姫路市文化国際交流財団

岸上がスマホを触っている

最近東京の家賃が高いから、という理由で俺と高瀬は同じ部屋に住んでいる。俺らが住む東京は東京でも、ネオンの煌めきや雑踏の喧騒とは違う。そこは、木漏れ日が揺れる静かな坂道と、時間がゆっくりと流れる安らぎに満ちた場所だ。

高瀬は、少しだけ気の合う、悪くないやつ。そういう存在。

そんな俺のルームメイトの高瀬は、恋をしているらしい。苦しそうで、楽しそうだ。俺はそれを斜めから見ている。恋は、自分のものじゃなかった。部活も、バイトも、何もかも「それなり」でやってきた。傷つかず、疲れず、生きることが一番だ。俺はそう信じていた。

ある日、暇だった。たぶんレポートから逃げていた。机に目をやると、机の上に黄ばんだ古い紙の束があった。

ぼくのためのノート 岸上大作

「なんで俺の名前……？」

中を開くと、文字が並んでいた。俺の文字ではない。俺のものじゃない。でも、どうやら偶然にも同じ名前だったらしい。そしてそこに書かれていたのは、あの岸上の、生きた軌跡だった。

最初のページを読む。

何かを追いかけていた。答えを、言葉を、感情を。必死だった。読むだけで、息が詰まる。胸が苦しい。

「……疲れるな。こんなの、読んでらんねえよ」

パラパラと最後の方をめくった。そこで、目に入った。

「デタラメダ！」